

東京都におけるウメの優良系統に関する研究

芦川孝三郎・土方智

I 緒 言

ウメは中国およびわが国南部地方に広く原生分布し、その歴史は極めて古い。古事記、日本書紀、万葉集などに、その名が現われていることは、よく知られているが、近年までは花を主とし、果実は副とされていた。しかし明治維新以来、軍需品としてのウメぼしの需要が高まり、果実生産を目的とした栽培が盛んになった。最近にいたり、ウメ酒用としての需要が急増したため、価格も高騰し、ウメ栽培の労働生産性の高いことと相まって、従来の散在樹を中心とした栽培から、本格的に園地を形成する栽培が各地で盛んになった。

ところがウメはその開花期が早く、厳寒の時に当たるため、寒害をうけやすく、結実が著しく不安定である。そこで結実の安定した品種の出現が待望されていたが、その要請にこたえるものとして、東京都青梅市産の「玉英」が、昭和36年12月にウメとしては始めての種苗登録を、うけるにいたった。これよりさき馴松市郎兵衛場長は、青梅市におけるウメ栽培の歴史が非常に古く、系統の多いことにかんがみ、当該地区を精細に調査すれば、ほかにも結実の安定した優良系統を見出せるはずであるとして、その調査研究を筆者らに命じられた。

そこで昭和34年度から青梅市吉野梅郷地区を中心に、附近一帯の在来諸系統の調査を行ない、後述する諸優良系統を選抜することができ、一部の系統についてはすでに増殖普及の段階に入っている。

本報告を草するに当り、常に調査上の便宜と御援助をいただいた青梅地区農業改良普及所大福本久所長、鶴岡正登技師、青梅市吉野農業協同組合野村栄参事、青木就一郎氏を始め同農業協同組合青年部員各位、および当場果樹研究室員の各位に対し、深く謝意を表する。

II 東京都青梅市におけるウメ栽培の沿革

品種、系統の調査を行なうには、当然それらの来歴をまず知る必要があるので、当市におけるウメの由来、沿革を探究することから始めた。青梅市は都下西多摩地方唯一の都市で、織物の産地として著名であるが、その名の示すように、ウメとの関係が極めて古くかつ深い。

当市の名刹金剛寺（青梅市滝の上）には、「将門の誓いのウメ」と称される古木が現存する。その昔平将門が手植えしたともいわれ、また一説には彼がウメの枝を杖とし、それをさかさまに大地にさしたところ、根付いて現在のウメの樹になったともいう。この樹から採取した種子を、金剛寺の末寺梅香山大聖院にわかつち、それから生じたウメが現在の「親木のウメ」（後述）であると古者は伝えている。この「親木のウメ」の種子を里人がまいて、戸ごとに植えたものが、青梅市のウメの起源といわれている。昭和13年6月に「わが村のウメ」と題して、当時の吉野村ウメ出荷組合が刊行した冊子によると、その沿革はおよそ次のとおりである。

『昔一条院の頃、モモの長者と柚子の長者とウメの長者とあり、三人ともに近郷にその名を知られたり。その一人ウメの長者は上郷川上弥五郎氏の一家なりし由、村の長老は語る。従ってモモの長者は二俣尾、柚子の長者は沢井の者ならん。上郷の大聖院に一本の白梅ありて、毎年馥郁として香を出せしかば、里人はこの種子をもち來りて、戸毎にわかつちてまきたるが、今日の如き隆昌の基をなしたると。……』

武藏風土記に記されているところを引用すると、『当所は古くより御料の地にして、正保年中は高室喜三郎氏が御代官所と村内六か所権現の領入会の村なるよしものに見えたり。その後近郷と同じく田安殿に分ち賜りしより今も変らずこの辺は梅樹多き地なるが故、その実をとりて江戸へひさぐ。大低年ごとに百駄以上を出せりと言ふ。また花の頃は所々の梅樹積雪の如くにして、幽賞いと奇なり』

以上を見ると、すでに当時相当のウメ樹が植えられ、産額もかなりのものであったことがうかがわれる。

さらに前記のウメ出荷組合の冊子から引用すると大要次のとおりである。

『(イ) 本村における梅樹の起源は、上郷の大聖院の梅樹を親木として、当所全般にわたりて拡がりしもの如し。

(ロ) 品種上から考究しても白梅に古木多く、その他の品種は少なし。これ大聖院の母樹が白梅によるものなり。

(ハ) 大聖院は青梅町の金剛寺の末寺にして、本村にお

ける他寺は、皆これと宗派を異にする。金剛寺には、「將門の誓いのウメ」を有しているので、その種子を末寺なる大聖院にわからしものならん。大聖院は梅香山大聖院と称す。

(二) 地名からしても本村は元霜村、または下村と称し、上中下の三部落の集合に、柚木(雪村)、日影和田、畠中の合併したるものなり。その上郷の小名に梅の内(メノウチ)と言うところありて、その寺は大聖院なり。

(ホ) 高札場所から考査しても、本村に2, 3か所ありて、その一か所は梅の内なり。

(ヘ) 風土記にも上村の内小名梅の内あり。

(ト) 天満宮の辺にある曹洞宗天沢院は、昔真言宗なりと言う。上郷の大聖院とともに、梅に関係ある寺院なり。梅林山天沢院と号し、所在する小名を天神と称す。

(チ) その他梅にちなんだ名称村内各所にあり梅ヶ谷峠、花溝(上郷小名)、梅ヶ久保(以下略)』

なお昭和初期および戦前の栽培規模、生産高について記録されているところをみると、次のとおりである。

吉野村部落別本数(昭和3年調査)

部落名	成木本数	未成木本数
中郷	2,537本	1,253本
畠中	1,372	2,231
柚木	668	710
日影和田	595	250
上郷	526	85
下郷	595	834
合計	6,293	5,363
総計	11,656本	

昭和10年～12年 ウメ果実生産高 石油箱1箱単価

昭和10年	4,500本	90石	1,530円	1円70銭
昭和11年	4,500	500	6,190	1.23
昭和12年	4,500	244	4,743	1.94

最近9年間の生産数量は次のとおりで、年により生産高の変動がいちじるしい。

最近におけるウメ生産高

(吉野農業協同組合取扱い分)

年 度	販売量(kg)	販売金額(円)
昭和31年	3,750	333,500
〃 32年	16,200	970,000
〃 33年	2,000	300,000
〃 34年	4,300	550,000

〃 35年	3,000	460,000
〃 36年	25,000	3,000,000
〃 37年	9,000	2,000,000
〃 38年	50,000	4,500,000
〃 39年	7,000	2,000,000

上記の数量は農協取扱い分だけなので、実際の生産数量はこの5割程度と推定される。現在大多数の樹は放任状態で、今後管理を充実すれば飛躍的増収が期待される。

なお東京都全体では、約150haの栽培面積が推定されている。(散在樹数を含めて約45,000本)

以上の諸記録をとおして、青梅市におけるウメの起源がいかに古く、またいかに住民の生活と密接に結びついていたかをよううかがうことができる。

一方青梅市のウメ栽培の発展に大きく貢献したもう一つの要因がある。それは川崎市小向地方のウメ栽培である。これは現在青梅市附近で最も多く栽培されている品種に、「小向」という名称がつけられていることからも、容易に知ることができる。すなわち、むかしは多摩川を利用して、青梅地方から盛に材木をいかだで流していた。そのいかだの舟付場が多摩川の大橋附近、当時の神奈川県橋樹郡小向村(現在は川崎市御幸町)であった。ここからいかだ流しの人々が、ウメの種子や苗木をもちかえり、青梅地方に広めたともいわれている。

そこで小向地方のウメを調べれば青梅市の現在のウメの原品種が判明するものと考え、調査を行なった。ところが不幸にもこの地方は、今次戦災で家もウメ樹もすっかり焼失し、戦後は商店街と工場地帯に一変し昔日のおもかげはまったく残っていなかった。たまたま土地の旧家を発見し、当主の齊藤麒一氏から隆昌を極めたあり日の小向地方のウメについて、大要次のような談話を得た。

『小向地方のウメ栽培は江戸時代から非常に盛で、明治22～23年頃にはその面積30町歩以上にもおよび、本所四つのウメ問屋から盛に買いに来たものである。当時はウメ果を塩漬けにして、大量に船で出荷していた。明治17年3月19日、明治天皇が小向の梅林に行幸された際、350年生の古木3本を天覧梅と名付け、当時の朝野新聞にも大々的に報導され、小向梅林の名声は広く世に知られるようになった。この天覧梅は後に所有者榎本幸太郎氏のもとから、横浜の三溪園に移された。また久慈の梅林(川崎市高津町久地川辺長和氏園)には、当家から移した古木(白加賀)が若干残っている。

小向地方で多く栽培していた品種は、在来種のほか、

白加賀、紅加賀、八房、豊後などが栽培され、これらを総称して「小向のウメ」と称していた。これらの苗木は在来種を除き、埼玉県安行地方から導入したものが多い。』

以上を総合して考えると現在の青梅市のウメは、大聖院の「親木のウメ」の子孫の諸系統と、川崎市小向地方からの導入種と、埼玉県安行地方から導入された諸系統との混合物から構成されているものと、推察される。

III 在来諸系統の特性調査結果

青梅市旧吉野村（現在は青梅市下と称す）を中心として、附近一帯のウメ樹のうち、品質が優良でとくに結実の安定しているものをえらび、調査を行なった。なお、品質が必ずしも優良でなくても、この地方独特と思われる特徴のある系統は、調査の対象に加えた。名称はふつうこの地方で通用する俗称をもちいた。

（1）寛ウメ（ゆたかうめ）

来歴 所有者 青梅市柚木692 野村寛

昭和2年頃大葉小向として植えた15本の苗木の中から、残ったものである。樹令約40年生。

樹性 開張性で下枝は極端に下垂する。樹勢は強健である。

葉 丸味をもった卵円形で、先端は尖りかつ曲がる。葉縁は波状を呈し、葉柄の陽光面は真紅に着色する。

花 白色五弁の大輪で、充実した長い雌蕊をもち、萼は丸い。花粉は少ない。

果実 中粒で1果重量は約30g。果頂はやや平坦である。平年で6月15日～20日頃がウメ酒用のウメとしての採収適期である。果梗のくぼみは浅い。1升粒数は約50個である。本種の特徴は果面が美しく、豊産な点にある。果形もよく、核の大きさは中位である。原本の収量は毎年約120kgに達する。黒星病に対する抵抗性は中位である。

概評 品質優良で豊産である。花粉の少ないのが唯一の欠点である。有望種。

（2）小次郎小向（こじろうこむかい）

来歴 所有者 青梅市柚木692 野村寛

明治22～23年頃、柚木の市川小十郎氏が本種の優秀性をみて普及したものである。したがって正しくは、小十郎小向と称すべきものであるが、前記通称でよばれている。

樹性 樹勢強健で開張性が強い。

葉 葉面は波状を呈さない。平滑な感じがする。先端は尖るがあまり曲らない。

花 開花期はやや早い。白色单弁で花粉は多い。

果実 中粒で1果重量約27g。平年で6月20日～25日が採収適期で、前記寛ウメよりやや10日おそい。核は比較的小さい。耐病性強く、黒星病の被害は少ない。

概評 やや晚生であるが品質優良で豊産。若木の結実期に入るのはややおそいようである。花粉が多いので、授粉用として好適する。

（3）持田白（もちだしろ）

来歴 所有者 青梅市柚木174 持田栄次郎

来歴不詳であるが原本の樹令は約50年生である。

樹性 樹勢強健で下枝はかなり下垂する。

葉 やや細長く葉縁は波状を呈さず、葉先は尖るがほとんど曲らない。小次郎小向にやや似る。

花 開花期は最も早い部類に属する。花形はやや小、雌蕊は中位の長さで萼はやや先がとがる。花粉は非常に多い。

果実 中粒の大で、1果重量約36g。形は円く、果頂部は平坦でやや傾斜する。果面の毛茸はやや長く、果面は白味をもつ。全体に豊満な感じがする。核は丸い。平年で6月20日前後が採収適期である。葉のない部位にもよく果実がとまる性質がある。黒星病の被害は他系統にくらべ、格段に少ない。

概評 品質優良で豊産、花粉も多いので授粉用としても好適する。有望種。

（4）川上ウメ（かわかみうめ）

来歴 所有者 青梅市上郷 川上清

当地原産の実生と推定されるが、くわしい来歴は不明である。

樹性 樹勢中位で開張性である。

葉 丸味があり、葉縁は波状を呈さず、葉先はとがるが曲らない。葉柄の陽光面はかなり赤くなる。

花 開花期早く、白色单弁、花粉多い。

果実 やや大粒で1果重量約35g。やや早生である。果肉は厚く、核は小さい。核は丸味があり、成熟したものは、非常に赤黒い特徴を有する。しんくいむし類の被害がやや多いようである。

概評 果実の品質も良好で、早生という点が面白いが、虫害の点を検討する必要がある。授粉用としては使用できる。

（5）市川小向（いちかわこむかい）

来歴 所有者 青梅市下1190 市川喜重郎

大正3年頃接いだものと言われるが、その穂木の入手経路が不明である。原本の樹令約50年生。

樹性 樹勢強健極めて旺盛で開張性。下枝はかなり下垂

する。陽光面の枝の着色は少ない。

葉 大形で濃緑色長卵円形、葉縁は波状を呈し、先端はとがり曲っている。新梢の先端は淡紅色を呈する。

花 白色単弁、雌蕊は長く充実している。萼は円形で、淡緑紅色を呈する。花粉は少ない。

果実 中粒で1果重量約30g。平年の採収適期は6月15日～20日である。縫合線は浅いが明瞭で、果頂ややとがるが形状よく、玉揃いもよい。結実性がとくにすぐれており毎年安定した収量を示している。原木の収量約130kg。

若木の結実期に入るのも早い方に属する。黒星病に対しては、とくに弱いということではなく、ふつうである。概評 品質優良で豊産、しかも結実が安定しているので有望種である。唯一の欠点は花粉が少ないとある。

(6) 大葉小向

来歴 所有者 青梅市柚木692 野村寛

来歴は不明である。

樹性 樹勢強く開張性である。

葉 とくに大形で平滑、葉縁は波状を呈さず、やや垂れる感じである。葉の先端はとがっているが曲らない。葉柄の陽光面は、極端に赤く着色し、葉面はやや黄色味を有する。

花 白色単弁、花粉を有する。

果実 中粒で1果重量約32g。果頂はやや平坦で陽光面は赤く着色する。梗くぼはやや深い。核は円味が強く、明瞭な溝を有する。やや晚生で、6月20日～25日が平年の採収適期である。果面の毛茸が多い。

概評 品質はあまり良好ではないが、花粉を有するので授粉用には使用できる。

(7) 鈴木青（すずきあお）

来歴 所有者 青梅市下200 鈴木賢三

原本の樹令約60年生、来歴は不詳である。

樹性 樹勢強健、開張性を有する。短、中果枝を密生する。

葉 やや小形で葉縁はわづかに波状を呈する。先端はとがり少し曲がる。葉柄はやや赤い。葉は濃緑色である。

花 花粉を有する。開花は最も早い方に属する。

果実 中粒で1果重量約28g。果色青味が強く、肉質は硬く粕漬用に最も適する。果頂は平坦でやや側圧果、縫合線にそってややふくれる。晩生であるが玉揃いよく、年々豊産である。

概評 形状はややわらいが、豊産で特有の肉質をもち、粕漬用としては最適である。

(8) 親木のウメ（おやきのうめ）

来歴 青梅市下 梅香山大聖院境内裏にある。原木の樹

令は約600年生と推定されている。現在は主幹が倒伏し腐朽空洞化している。下部から不定芽が発生し、現在の樹冠を形成している。金剛寺の「将門の誓いのウメ」の種子をまいたもの、あるいはそれから根分けしたものともいわれている。

樹性 樹勢は中位、枝の陽光面は赤く着色する。樹幹は古くなると著しくねじれる性質がある。

葉 やや細長く小形で、葉縁は波状を呈さない。葉先はあまりとがらず、ほとんど曲がらない。

花 白色単弁で花粉を有する。

果実 現在は管理不充分のため貧産で果実も小さいが、もとは豊産であったという。果頂は比較的平坦で、果面はやや白味を有し、いわゆる白ウメに属する。核は未熟のうちから赤味が濃く、特徴のある丸い形をしている。1果重量は約25g。

概評 現在は管理不充分のため、経済性を検討する段階ではないが、次第に樹勢を回復しつつある。銘木として貴重な文化財である。

(9) 玉英（ぎょくえい）

来歴 原木所有者 青梅市二俣尾637 野本英一

当主の嚴父元次郎氏が植えたものとされているが、すでに物故され来歴の詳細は不明である。原本の樹令は約50年生、幹周83cmに達する大木である。戦後ウメ酒用のウメとして、とみに名声を高め、昭和35年12月23日付で登録番号144号として種苗登録された。

樹性 樹勢強健で開張性。下枝はやや下垂する。枝は太く密生し、新梢は淡緑色の地にわづかに紅色を現わす。葉 厚味があってやや大きく、光沢があり、葉縁は波状を呈している。形状は丸味のある卵円形で、先端はとがり曲がっている。

花 微黄白色単弁であるが、6～7弁のものもある。花弁の形は丸味の強い短紡錘形で、萼片は淡緑色の地に紫紅色をおび、形状はやはり著しく丸味を有する。雌蕊は太く長く充実し、雄蕊は平均50本くらいで、不完全花の発生は非常に少ない。開花期は2月下旬から3月中旬である。花粉はわづかしかない。

果実 全体に豊満な感じのする球形でやや長味をおび、比較的大きく果重は平均32g内外である。果実の先端はややとがる。縫合線は浅いが明瞭である。果皮は淡緑色で美しい。果肉は厚く、核は短紡錘形で、溝、点刻は明瞭である。収穫期は6月中旬である。黒星病に対する抵抗性は、弱い方ではないが、冬期の石灰硫黃合剤の散布など、通常の防除は必要である。

概評 果実の形状がよく、果皮も美しい。品質優良で結

花の特性調査

品種名	花の大きさ	萼の色	蕊の関係	花粉量	不完全花歩合	開花早晩	備考
寛ウメ	中の大	紫紅緑色	♀≤♂	極少	少	中	花弁はやや重なる
市川小向	中	〃	♀=♂	極少	少	中	
玉英	中	〃	♀=♂	極少	少	中	
小次郎小向	中	紅緑色	♀≥♂	やや多	中	早	萼片のうらまで紅い
大葉小向	中	〃	♀=♂	多	中	晩	雄蕊数多く太い
持田白	中の小	〃	♀≤♂	多	中	早	雌蕊太い
川上ウメ	中	〃	♀<♂	多	中	早	
鈴木青	中の小	〃	♀=♂	やや多	少	早	
親木のウメ	中	〃	♀<♂	多	中	中	

蕊の関係は雌蕊と雄蕊の高さ（長さ）の優越関係を示す。

果実の特性調査

品種名	果実の大きさ	果形	果色	核の形	核の溝	点刻	果実の熟期	備考
寛ウメ	30.0g	長円形	黄緑色	長楕円形	完全	密	中	
市川小向	30.0	〃	〃	〃	〃	〃	中	
玉英	32.0	〃	〃	〃	〃	〃	中	
小次郎小向	27.0	〃	〃	〃	〃	〃	やや晩	
大葉小向	32.0	円形	青み黄緑色	短楕円形	〃	粗	やや晩	毛茸がやや長い
持田白	36.0	扁円形	白み黄緑色	〃	不完全	密	中	毛茸がやや長い
川上ウメ	35.0	長円形	黄み黄緑色	〃	完全	中	やや早	
鈴木青	28.0	円形	青み黄緑色	長楕円形	完全	粗	やや晩	
親木のウメ	25.0	円形	青み黄緑色	短楕円形	不完全	中	中	核が小さい

実が安定している。花粉がわづかしかないので、授粉樹の混植を要する。

以上の各系統について、花および果実の特性をまとめみると上表のとおりである。

IV 総括

ウメは他の果樹にくらべ、改良の程度が進んでいないので、品種系統間の差異が比較的少なく、類似した品種系統間の判別にくるしむことが少なくない。栽培地の土質、地勢などの環境条件や、台木の相異などにより、開花期や果実の大きさ、形状、熟期などがかなり変動することは、常に見聞するところである。その上同一品種系統と思われるものでも、地方により名称がまちまちなので、一層の困難性を加えている。

したがって性状の類似した諸系統を正確に分類し判別するためには、諸条件によって、変動しやすい量的形質にたることは、極めて危険である。花粉の有無とか、花弁の着色の相異とか、明瞭に区別できる質的標徴の差異にもとづいて、判断しなければならないと思う。量的

形質によって判別するには、当然同一場所に、できれば同一栄養系の台木を使用した個体を栽培し、同一の管理のもとに現われてくる各系統間の差異を、把握するようすべきである。本報告は、環境条件の異なる場所に栽培され、樹令、台木なども異なり、まちまちな管理のものにある成木について、調査を行なったものである。そのため顕著な質的差異以外は、年により若干の変動をみとめている。

しかし本調査の目的は、あくまで実用的見地から、この地方に適する結実の安定した優良系統をえらび出すことにあるので、一応の目的を達成したつもりである。調査結果をみて容易にわかるように、玉英、市川小向、寛ウメの三系統は、互に性状が酷似していて、果実の大きさや形、熟期などの量的形質に若干の相異がみとめられるにすぎない。これらの系統の間の量的形質に、明瞭な差異が生じてくるかどうか、また全国的に著名な優良品種とくらべ、どのような優劣があるかについて、昭和36年度から同一場所で多くの系統を集めて比較試験を実施中なので、いずれ別の機会に報告するつもりである。すでに昭和39年度から結実期に入ったが、本調査の結果えら

び出した各系統は、ごく一部の系統（小次郎小向）を除き、いずれも満足すべき結実を見せ始め、地元はもとより各方面の関心を集めている。

(1) 毎年結実の安定したウメの優良系統を見出すために、昭和34年度から東京都青梅市旧吉野地区を中心として、附近一帯のウメ樹の現地調査を行なった。当地区には古い時代からの実生と思われる在来種や、川崎市小向地方、埼玉県安行地方などから導入された諸系統が混在しているが、ほとんどのものは正確な来歴が不明である。

(2) 最も品質優良で結実の安定している品種は、玉英市川小向、寛ウメである。ただしこれらの各品種は、花粉がわづかしかなく、実用的には無いものとして授粉用の品種を必らず混植しなければならない。

(3) 品質優良で授粉用にも適する品種としては、持田白である。

(4) 品質に若干の問題はあるが、授粉用として用いるものとしては、大葉小向、川上ウメ、鈴木青、小次郎小向、親木のウメがあげられる。

文 献

1. 石井勇義：園芸大辞典 第1巻 1944 誠文堂新光社
2. 川上繁：園芸学会 昭和26年春季研究発表要旨 1951 養賢堂
3. 菊池秋雄：果樹園芸学（上巻）1948 養賢堂
4. 黒上泰治：果樹園芸学各論（上巻）1956 養賢堂
5. 高馬進：梅の品種と結果枝の優劣調査 農業及園芸15巻5号 1940 養賢堂
6. 式地俊材：梅の栽培技術 1941 賢文館
7. ...ム士巳・柏木小五郎：梅の育種学的研究（1～2号）農業及園芸 16巻第4号, 1941 30巻4号 1955
8. 早崎正雄：梅樹の品種間における木質部組織の異同について 農業及園芸 14巻9号 1939
9. 松原茂樹：梅の栽培上の考え方 農業及園芸 24巻5号 1949
10. 宮沢文吾：花木園芸 養賢堂 1940
11. 保田亀太郎：南部梅1, 2号の特性 農業及園芸 10巻12号 1935

Investigations on the High-Grade Varieties of *Prunus Mume* in Tokyo Kozaburo ASHIKAWA and Satoru HIJIKATA

Summary

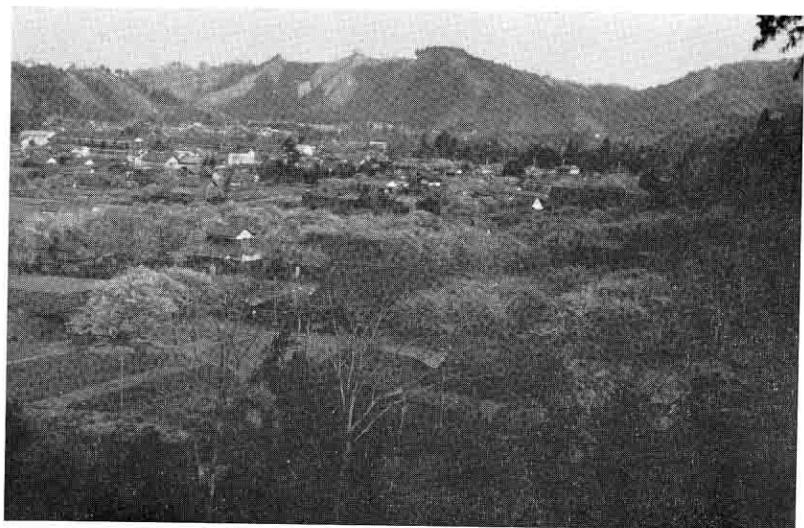
The cultivation of *Prunus Mume* in Ome district, Tokyo, has been originated in ancient times, and now there are many local varieties. They chiefly consist of the native varieties and those which have been introduced from Komukai and Angyo districts. Very little are known about their histories.

In order to find out some high-grade fruitful varieties of *Prunus Mume* among local varieties in Ome district, investigations have been carried out 1959. The result are as follows.

1. Gyokuei, Ichikawa-Komukai and Yutaka-Ume were found out to be high-grade varieties. They are very fruitful every year and their fruits are high quality. But they need some pollinizers because they have poor pollen.

2. Mochida-Shiro was graded the next favourable variety, which, is fruitful and has rich pollen, and therefore suitable as a pollinizer.

3. The third-grade varieties were Ota-Komukai, Kawakami-Ume, Suzuki-Ao and Kojiro-Komukai. They are also fruitful and available as pollinizers, however some problems in their qualities and other characters remain to be settled.



当場果樹委託試験地（青梅市吉野中郷）

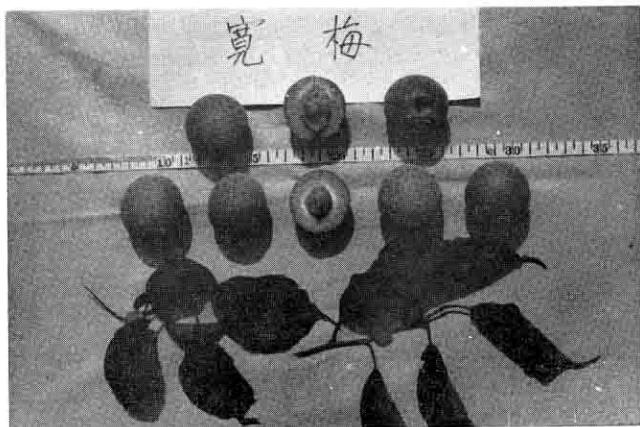


将門誓いのウメ（青梅市金剛寺）

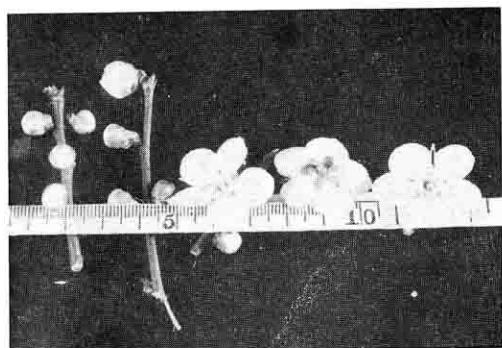


図版 2

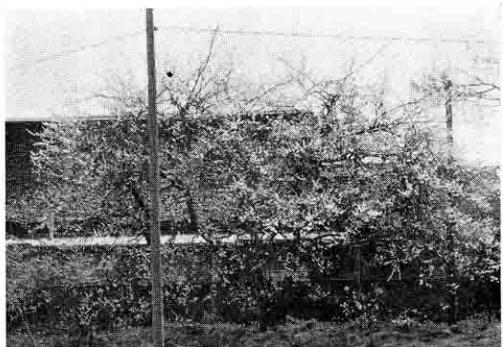
寛ウメ



果実と葉



花



原本開花状況

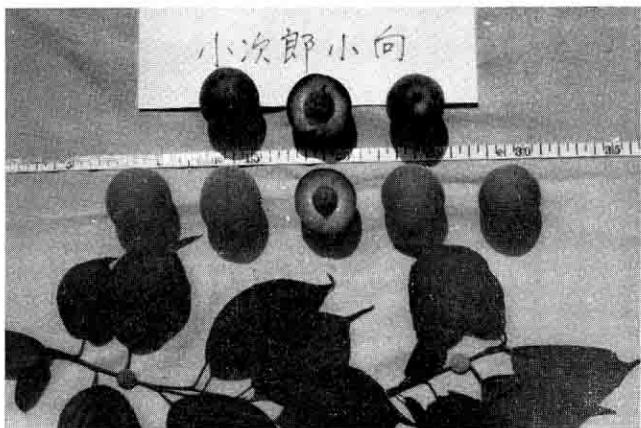


結果状況

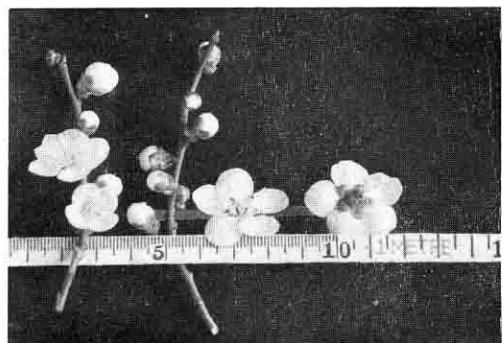


5年生樹

小次郎小向



果実と葉



花



原本開花状況



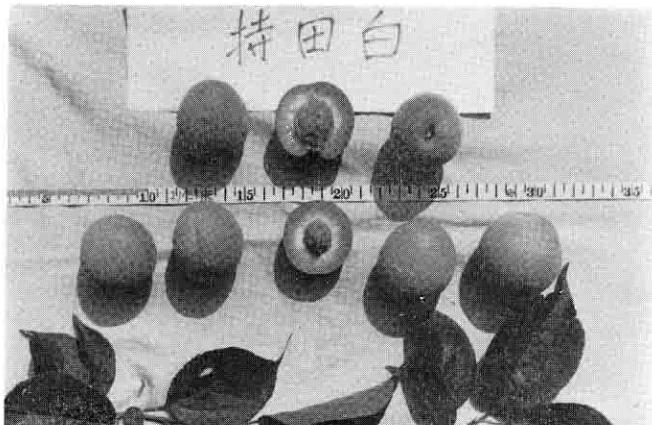
結果状況



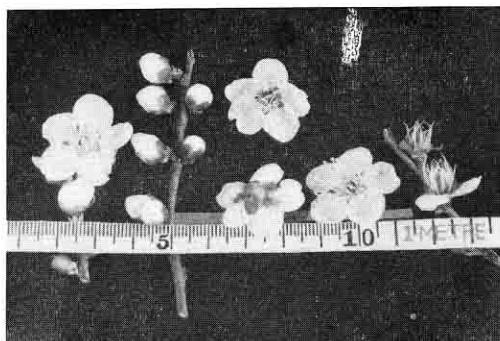
5年生樹

図版 4

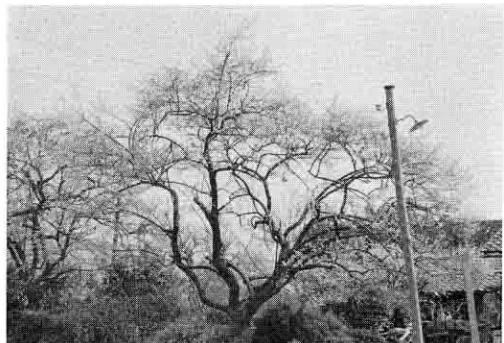
持田白



果実と葉



花



原本開花状況

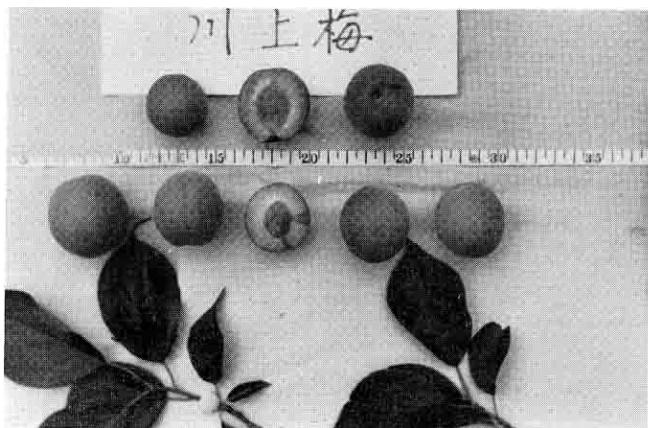


結果状況

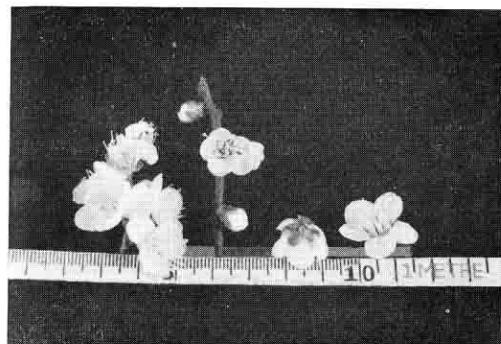


5年生樹

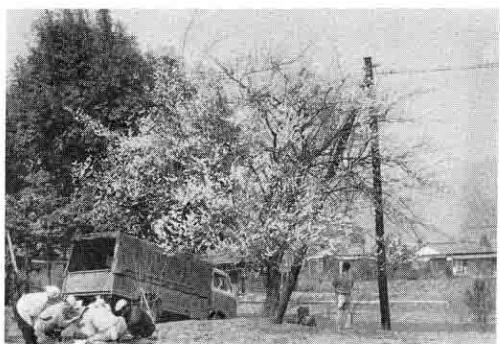
川上ウメ



果実と葉



花



原木開花状況



結果状況

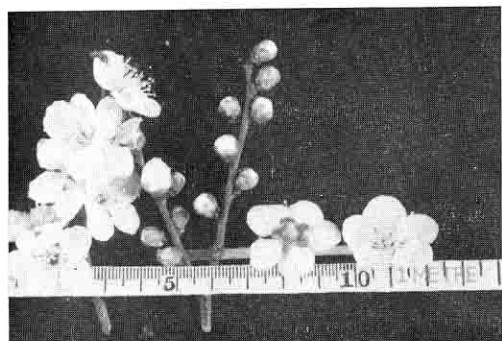


5年生樹

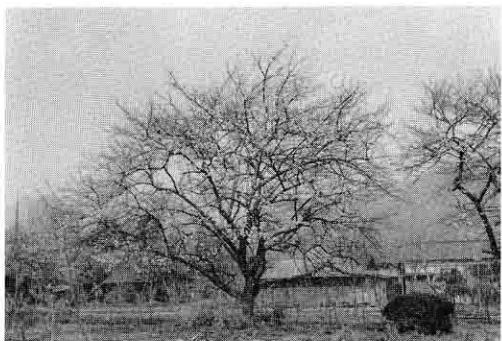
市川小向



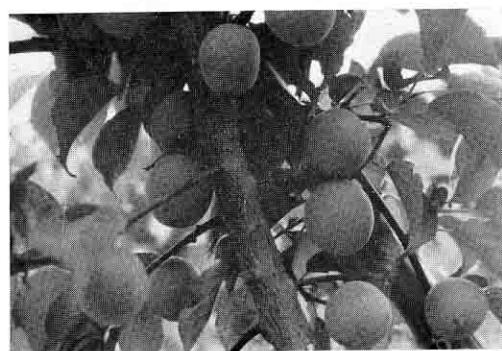
果実と葉



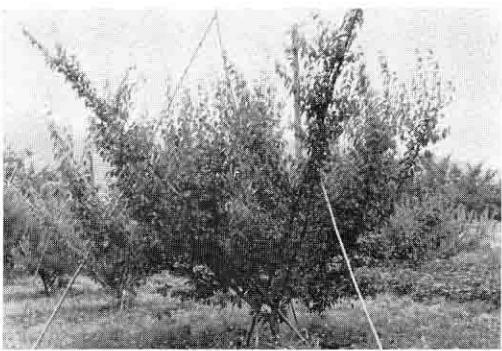
花



原木開花状況



結果状況

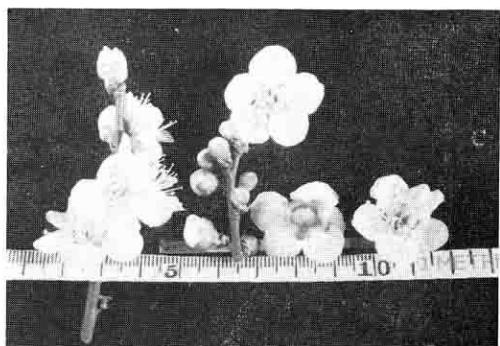


6年生樹

大葉小向



果実と葉



花



原木開花状況



結果状況



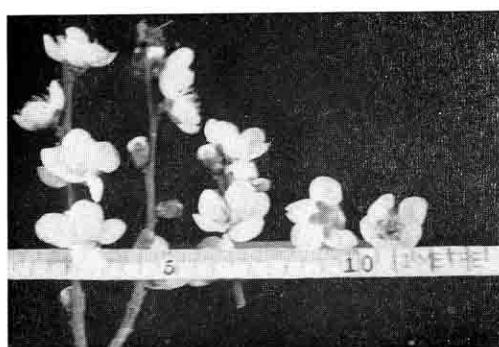
5年生樹

図版 8

鈴木青



果実と葉



花



原木開花状況

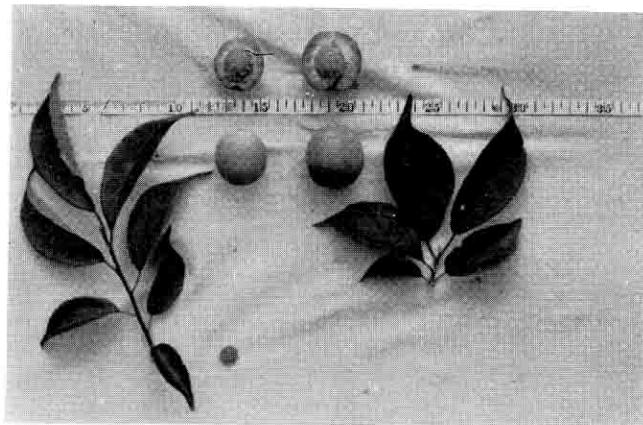


結果状況

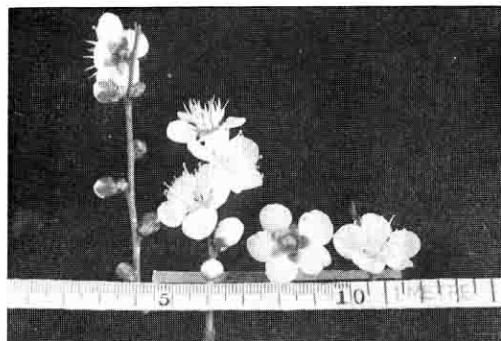


4年生樹

親木のウメ



果実と葉



花



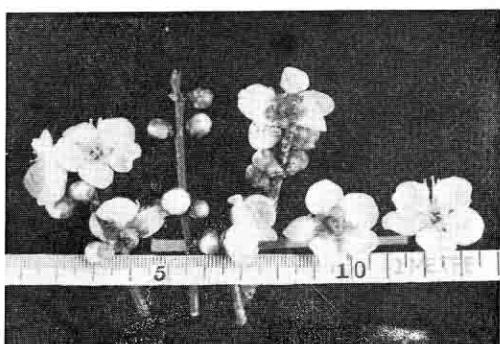
原木開花状況



原木



果実と葉



花



12年生樹開花状況



結果状況



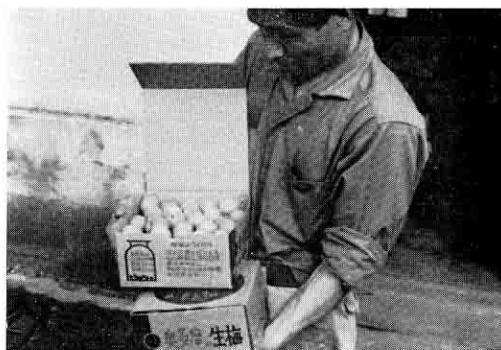
5年生樹



選果風景



出荷



2 kg詰出荷箱



品評会審査風景



特賞果実